

特別寄稿

## ヒューマン・ケア研究における枠組み [I] \*

—医療・看護・心理・教育・福祉介護などを抱括する「臨床学」構築への志向—

大阪教育大学名誉教授 上野 轟

### 目次

#### 本論の主旨

1. 科学の規定の不充分さ
2. 人間学としての心理学という科学の構成過程—城戸幡太郎の所論から
3. 「人間の科学」としての心理学における方法論に関する検討  
いとぐち  
緒
  - 1) 「人間の科学」としての心理学の目的とその対象について
  - 2) その方法論上の問題
  - 3) 現象学的方法・視座の必要と要請
4. 現象学的方法・視座：「我・意識対象を 意識す」—我の取る～との関係の仕様とその様態

#### 本論の主旨

ヒューマン・ケア研究における枠組みに関わって、医療・看護・心理・教育・福祉介護などを包括する「人間の科学」に位置づけ、「臨床学」構築への志考をはからおうとする。

ここに至りつく契機と動機づけが、三つある。

ひとつは、次のことである。

周知の如く、科学は、物理学・化学・生物学など自然科学が、19世紀初頭、開花し、隆盛を極めてきた。それで、筆者専攻の心理学を初め、諸学は、自然科学の目覚ましい諸成果に魅せられ、自然科学を模範として、その科学の成立を図ってきた経緯があった。

そのため、科学とは、「主客分裂思考法」<sup>1)</sup>に基づく、「客観性」(モノ・客観と認識・主観との一

致<sup>2)</sup>)に、科学となるであろうことの証として、これを自明なる公理として来た。その結果、そうした自明性のもと、科学成立を認知したため、自然科学以外の科学に関する吟味・検討は、その必要性がないかの如く、ほとんどなされてこなかった。それと同時に、科学における没主観性あるいは脱主観性を公理とし、客観性への偏重をもたらしてきたことである。

ところで、冒頭に提示の「人間科学」に関わって、科学とは何かの吟味・検討は、上に記載した意味において、今日、必須の課題となってこよう。

わけて、専攻の心理学に関して言えば、かつて、「Kant, I. の批判的哲学：唯物論と唯心論との二律背反を解決する認識論に心理学があり、その体系的帰結としての存在学である人間学があった」<sup>3)</sup>と

\* 本学会の名誉会員であり設立メンバーのひとりである上野轟先生からご寄稿いただきました。本号と次号に分けて掲載いたします。

言われる。

「20世紀半ば、心理学は、人間を自然科学的説明と精神科学的了解から考察し、精神は認識の主体であり、人間において存在する機能を置く。かくして、認識の問題は、同時に存在論として取り扱われねばならなかった。」<sup>4)</sup>

かくして、「人間学は、精神論を介して、認識の問題と存在の問題との間に立って、哲学的矛盾を蔵した大きな問題を提出することになった」<sup>5)</sup>。

そこで、「心理学は、人間学の関連において、一方で認識の問題(方法論)として哲学と関係し、他方で存在の問題(対象論)として科学と関係することになる。現代心理学(昭和25、26年以来、今日も依然として)は、方法論的に行き悩んでいる。」<sup>6)</sup>

そこには、人間学という人間の科学と言っても、科学であるためには、依然、方法論的に「主客分離の思考法」に依拠せねばならないとの科学であることの自明性への信奉が見られるからである。時間は、今日、21世紀前半を走って行く。そんななかで、科学であることの自明性への信奉を改めていかねばならない。

範としてきた自然科学と言えども、それはもともと生活の只中での我々人間の営為である。この原点に立ち還って、わけて、「人間の科学」に関して、人間の諸属性に適う科学なる新たな視座から科学なる世界への覚醒・構築を急がねばなるまい。

このことが、もうひとつの契機であり、動機づけなのである。

そして、最後三つ目の契機と動機づけは、筆者の個人的なことで、恐縮なことだが、日常切実な次のことである。

それは、次世代を担う子どもや若者に対する健やかな育みの問題と、人生を全うする高齢者に対する介護ケアなどに関わる問題である。

息子夫婦と娘夫婦の孫たちを含め、昨今、子ど

もや若者への健全なる成長を切実に実感し、願うこと痛切である。あわせ、筆者自身、妻ともども、人生最終仕上げの後期高齢期にあり、筆者は、介護I認定のもと、介護ケアを受けており、とりわけ、切実な思いのうちにある。

筆者は、かねてより、「病床の臨床心理学―病気像と病気との和解」<sup>7)</sup>のもと、病気でありながら、人間的に健やかなあり方としての病気との和解を提唱してきていた。

また、筆者は、現役を退いた70歳代前半から種々の疾患体験(腰痛の源、脊椎管狭窄症の手術;耳下腺良性腫瘍の手術;下腹部ヘルニアの手術など)を経て、70歳後半に入り、大腸憩室からの下血での入院治療;真夜中、呼吸困難、歩行困難、ろれつが回らないことで1ヶ月はさんで2回救急搬送を起こし、これが脳梗塞の後遺症反応と診断され、かくして、介護Iの認定に立ち至ったのである。この間、再々度、自ら自分自身へのありようが厳しく問われた。沈没しそうな自分を支えてくれたのは、妻や息子夫婦と娘夫婦、そして孫たちであった。

思いを致せば、妻との出会いは、彼女が仙台市精神衛生相談所、通称ベビーホームで、小児科医、精神科医、心理臨床(臨床心理士)、精神医学的ケースワーカー(PSW、精神保健福祉士)の治療ケア・チームの一員PSWとして働いていた。そこに大学研究室派遣の臨床心理担当で加えてもらったところであった。

人との出会い、機運とは摩訶不思議なことである。筆者が、学部時代、肺結核で入院治療を受けた東北大学抗酸菌病研究所・病院の協力を得て、それで卒業研究:「肺結核患者の心理」<sup>8)</sup>ができ、病気の心理研究のスタートとなった。そのとき、当時、研究所の図書室の司書の方が、筆者の必要な文献のコピーをやってくれた。その方が、後に、実は、妻の妹であったことを知り、驚嘆したものである。

それにしても、現在、筆者が介護ケアを受け、PSW の経験を経て、その後、臨床心理士としてともに歩んでいる妻が中心となって、家族がケアチームとなって、家族の健やかな関係を築こうと努力しているのを見るとき、冒頭提起の枠組みの構想への着想があり、これの実現の原動力となって、大きな励みの力となっている実感にある。

そこには、援助する者が、援助される者となって、初めて、援助者と真になりうるといふ問われる状況に恵まれているからである。

## 引用文献

- 1) Descartes, R. (桂寿一訳)：哲学原理．岩波文庫、2014 (1964) pp.84-87 (第51項～第53項)．  
Descartes, R. (谷川多佳子訳)：方法叙説．岩波文庫、2013 (1997)、pp.46-47.  
Jaspers, K. (草薙正夫訳)：哲学として．新潮文庫、1956 (昭29)、pp.38-50.
- 2) 城戸幡太郎：結論 人間としての心理学の問題 現代心理学—その問題史的考察．評論社、1951 (昭25)、pp.257-258.
- 3) 城戸幡太郎：第一編 第一章 哲学的人間学と精神科学．2)に前掲書 pp.3-4.
- 4) 城戸幡太郎：第二編 第一章 精神科学と心理学．2)に前掲書 pp.71-72.
- 5) 城戸幡太郎 第三編 第一章 心理学と性格学．2)に前掲書 p.199.
- 6) Allport, G.W.：Becoming —Basic Considerations for a Psychology of Personality. Yale Univ. Pr. 1955 p.7, pp.7-22, pp.12-17.  
Allport, G.W. (豊沢登訳)：人間の形成—人格心理学のための基礎的考察．理想社、1967 (昭34)、pp.22-23、pp.24-34、pp.35-46.
- 7) 上野轟：患者に対する精神的援助に関する研究—現象学的方法による“病気との和解”の方途を探っ

て．風間書房、1994 (平成6)．

これは、「病気との和解実現の方途を探って—体験学習におけるグループ受容体験をモデルとして」の論文 (久留米大学より医学博士授与、1992 (平4) を整序・体系化をはかり、文部省学術出版促進費からの援助を得、公刊された。

上野轟：病床の臨床心理学—病気像と病気との和解．フィリア、2006.

これは、上記医学博士授与の論文の母体で心理学にはなかった病気概念としての病気像 (人がその病気を受けとめ、抱くイメージ) に着目、病気と密着した人の心理に迫ることを開いた。そして、病気でありながら、人間的に健やかなあり方として、病気像の変容 (人のその受けとめ方の変容) による病気と和解する人と出会い、この提言に至る病気像の諸研究を製序・体系化した病床の臨床心理学としたものである。

- 8) 上野轟：適応理論からみた患者の心理．看護学雑誌、1967、vol.31、No.5-7.

## 1. 科学の規定の不十分さ

科学は、改めて問い直すまでもなく、余りに自明的に、一般的に理解されている。これを、いま、電子広辞苑を通じて、「科学」を引いてみると次の記載がなされている。

「科学 Science (英、仏) Wissenschaft (独) は、①体系的であり、経験的に実証的な (客観的) 知識、物理学 (エネルギー不滅の法則の発見)・化学 (物質を構成する分子の発見)・生物学 (進化論) などの自然科学が、科学の典型であるとされるが、経済学・法学などの社会科学また心理学・言語学などの人間 (の) 科学もある。

②狭義では、科学は自然科学と同義である。なお、文中 ( ) は筆者が追記した。

この記載の背景には、19世紀初頭自然科学が成立・開花し、隆盛した目覚ましい諸成果に魅せら

れ、他の諸学がその科学成立に向けて、自然科学を模範にして為されてきた経緯が色濃く反映されていることが推察されてこよう。

そこには、科学イコール自然科学—狭義だが—を指していること、なるほど、法学など社会科学、また、心理学など人間科学を承認するが、経験的に実証可能な客観的方法による客観性を前提にしていることが内包されているからである。直截に言えば、社会科学や人間科学に関して、その詳細な記載が見られないからである。

ところで、自然科学の成立は、周知の如く、「Descartes R.の物心二元論、主客分離の思考法に基づく客観的方法<sup>1)</sup>」にあった。

ここでは、「科学者は、その研究対象、たとえば、人を第3人称的に突き放し、置き、ながめ(…) (観察し)、対象化・モノ化する。この照り返しにより、科学者も自らモノ化・客観化され、(科学的技術による器械の開発・採用もはかられてきた)、研究対象を分析し、そこから因果律を導き、一般的原理や法則を導き出し、分析して知る(…)との説明的仕方をとるのである<sup>2)</sup>。」

科学は、こうして、われわれ人類にとって、科学的に真実なる客観的事実・真理を手にし、そこから科学的技術化がはかられ、人間の生活におけるモノの豊かさ、その簡便さ、利便さ、有用・有効性等々恩恵をもたらしてきた。

ちなみに、人間の成長・発達の過程に象徴されて明らかなように、自然科学の誕生は、主客分化の自覚のもと、「自らの主体性の覚醒<sup>3)</sup>」とともに、知性人(Homo Sapiens)の地位を得て来たことと密接に関係している。

また、心理学が、科学の成立に関わって、自然科学を範としたのも、次のような経緯があった。それは、当初、重量の感覚研究で、刺激・客観とその感覚・主観とは、一対一の関係(恒常仮定と呼ぶ)にあって、両者の一致が証され<sup>4)</sup>、自然科学にお

ける客観性と同義ゆえに、後の感覚以外の研究にも該当するものと考え、(自然)科学としての心理学の成立を見たとしたからである。

しかし、その後、まもなく、感覚・知覚領域で、人や物の大きさの見え方が、レンズの如く(恒常仮定)、距離に反比例して物の見え方にはなく、距離にかかわらず、物の元の大きさに近く見ようとする大きさの恒常現象が見い出されてきた。そのため、先の恒常仮定は棄却され、人独自の物の見え方に注目、関心を惹いた。

その際、自然科学における客観性、すなわち、刺激・客観とその認識・主観との一致—「モノがモノとしていつもかわらずに持ち続ける客体的同一性<sup>5)</sup>」にではなく、むしろ、「研究者大多数の間で一致した見解である集成的主観としての客観性<sup>6)</sup>」を暗黙したのだが、これに関する詳細は一切触れられていない。

ただし、その後、心理学を行動の科学として成立させる思潮と主張を提唱する流れが起きてきた。心理学は、自然科学に倣って、内で、見えない意識ではなく、外から見える行動(生体機構と機能・機序として)にその研究対象を置き換えてきた。1910年代、米国のWatson J. B.による行動主義心理学の提唱である。

あわせて、電子広辞苑によれば、1930年頃、Wienに始まった実証主義哲学が英国や北欧の統一科学をなし、第2次世界大戦中に米國に広まり、1950年代にこれが日本に入って来た。そして、操作主義と共に、論理実証主義が、自然科学に替わって、実証可能な取組みの仕様が行われるようになってきたのである。

心理学は、わけて、この論理実証主義のもと、行動の科学として成立されることに向けて、科学的研究の発展の一途を辿ってくるようになった。

ここでは、仮説演繹に基づく実験法や調査法により、帰納法の実証を通じ、法則定立を目指し、行動の生理学的機序を解明するといった因果的説

明原理、および、行動の生起に関わる心理学的因子を「構成概念※」として組込み、その間の統計学的相関関係の説明原理を探求するのである。その際、一貫しているのは、「操作主義※※」なのである<sup>7)</sup>。

#### ※構成概念 (construct)

自然科学におけるエネルギーの概念のように、それ自身は観察可能ではないが、観察可能な諸現象を説明するために仮定され、構成された概念である。たとえば、行動生起に関わる「欲求」も構成概念である。

#### ※※操作主義

科学概念は、それが得られる具体的な操作によって定義されるべきであるとする立場である。たとえば、上に例示の「欲求」という構成概念は、食餌に辿り着く道を阻止する壁の高さによって測るといった操作・仕方で、これを食餌行動への欲求量(の強弱)と見なすのである。

上に記載の通り、科学イコール自然科学イコール操作主義による論理実証主義のものと実証、その客観性の証しを見とり、科学的真理・事実と見做す。その際、「主観性の排除・脱主観性を唯一科学的公理としている」<sup>8)</sup>。

このことは、科学における客観的同一性としての唯一の客観性イコール真理・真実への信奉でもあり、偏重であり、思い込みであって、誤りだと言わねばなるまい。

もっと言えば、自然科学だと言っても、科学の営みは、もともとわれわれの生活の現実での只中で為す営為なのである。「知るもの(主観)と知られるもの(客観)との一致の判断も人間の営為であり、その主観性の反映をのがれることはできない筈である<sup>9)</sup>」からである。

その際、成程、情意に代表されるわれわれ人間

の属性は、知性にして真理・事実を曇らせ、歪めることが実際あって、そうした誤りは、科学において、排除されなければならない。そうした指摘は、よく理解でき、その通りである。

しかしながら、そうだからと言って、主観性を排除し、「客観性<sup>5)</sup>」を証した唯一の科学であることを標榜することは、上記のことから、明らかにできないことである。

加えて、自然科学的客観的方法、および、操作主義を伴う論理実証主義のもとでは、科学として、個を問題にして取扱わないこと、あわせて、善・美・聖などに象徴される価値の問題には触れないことを挙げている。

ここでは、われわれ人類が担う静にして知性なる客観属性に依拠するが、動にして情意なる主観属性の排除をはかっているのが知られよう。

その結果、生の現実を生きる私や私たちの具体相に接近し、迫ることができない。否、科学は、それ(客観的方法に基づく客観性が保持されないこと)は取扱わない。このことは非合理であり、客観性への偏重に伴う恣意であるとさえ思われるからである。

ただ、客観的方法による客観性の保持の心理学は、人間一般に関わる一般心理学の成立をもたらし、その意味を有していたことは重要である。心理学専攻の筆者を初め大多数の専攻者達は、これを正統的科学的心理学の教科書や心理学概論という題の講義を眼・耳にして手にしてきたのに違いない。このことをここに明確にしておきたい。

それにしても、人間の科学として、科学が充足しておかねばならない事項に関して、城戸による人間学としての心理学という科学構成過程に触れていきたい。

## 引用文献

- 1) Descartes R. (桂寿一訳): 哲学原理. 岩波文庫、2014 (1964)、pp.84-87 (第51項～53項).  
Descartes R. (谷川多佳子訳): 方法叙説. 岩波文庫、2013 (1997)、pp.46-47.  
Jaspers K. (草薙正夫訳): 哲学入門. 新潮文庫、1954 (昭29)、pp.38-50.
- 2) 上野轟: 話の聴ける看護師になるために一対人・対話関係の技術. 医学書院、1978、pp.36-39、pp.43-47.  
上野轟: 病床の臨床心理学—病気像と病気との和解. フィリア、2006、pp.37-38、p.40.
- 3) Spranger E. (土井竹治訳): 青年の心理. 五月書房、1973 (昭48)、p.48.  
北村晴朗: 自我の心理. 誠信書房、1960 (昭35)、pp.76-78.  
Jaspers K. (内村祐之・西丸四方・島崎敏樹・岡田敬蔵訳): 精神病理学総論(上巻). 岩波書店、1953 (昭28)、pp.185-194.
- 4) 今田恵: 心理学史. 岩波書店、1962、pp.185-186.
- 5) 早坂泰次郎: 看護と人間—ヴァン・デン・ベルグに寄せて. van den Berg J. H. (早坂泰次郎・上野轟訳): 病床の心理学. 現代社、1990 (1975)、p.148.
- 6) 早坂泰次郎: 5)に前掲載、p.149
- 7) 八木晃 編: 心理学 I. 培風館、1967 (昭42)、pp.9-17.
- 8) 早坂泰次郎: 5)に前掲載、pp.145-146.
- 9) 早坂泰次郎: 5)に前掲載、p.149

## 2. 人間学としての心理学という科学の構成過程 — 「城戸幡太郎の所論<sup>1)</sup>」から

既に指摘の如く、心理学を始め諸学は、自然科学に模して、その科学の成立を帰した。そのため、自然科学以外の科学成立に関わる所論は無きに等しい。そうした状況のなかで、城戸による提言的所論「人間学としての心理学の問題」に触れ、注目

させられた。

第1は、人間学という科学としての心理学の方法論に関わって、自然科学以外の科学成立について、これまでと全く空白のため、不詳になっていた事項に触れ、空白が満たされるからである。

第2は、城戸のこの所論は、次のところに位置づけ、検討することができると思えたところにある。それは、Allport G. W. による「人間の形成に関わる Locke 的伝統・思潮: 英國の経験論を主軸とした自然科学成立・展開の基盤と Leibnitz 的それとの対置・相反: 欧州大陸の合理論を主軸とした精神科学成立・展開の基盤の提示<sup>2)</sup>」と「これに対する折衷主義の見地<sup>3)</sup>」に相応する見解の所論と見取り検討したことである。

しかし、城戸には、第3に、科学が、もともと、主客分離に基づく物心二元論、すなわち、分析し知る考え方に依拠して成立している残滓が見られることである。

それは次のことである。

「心理学では、問う者・「私」が、問われる者・「私」と同一であるとの二律背反の問題が内包されている<sup>4)</sup>。」「人間が人間を自ら考えた知識で科学することは、解決困難な矛盾である<sup>5)</sup>」と考えているからである。

その際、「自然科学の対象・モノ (たとえば、生体の機構と機能) は、客観化され、いかなる科学者が観察しても、同一に経験される現象である。かくして、客観化された自然の存在は、個人の経験を越えた普遍性において認められ、ここに経験の主観性は完全に克服されたということが出来る<sup>6)</sup>」としているからである。

人間をかく対象として分析し知るとき、経験を絶えず客観化していく方向の一面において、除外されつつ、残されていく主観化の方向において、われらにとって、自然の認識とは全く異なった方法によって認識される存在を明らかに経験する。これを自然に対して、精神・自我と称する<sup>6)</sup>

「われらは、こうして、経験を客観化していく方向で、自然科学における自然を空間概念として認識する。また、客観化とは対置・相反し合う主観化していく方向で、精神科学における精神を時間概念として認識する。そして、両方向・両者は相互に交渉し合う<sup>7)</sup>。」

ちなみに、人間に生体・からだとしての存在(側面)と精神・こころとしての存在(側面)とがあり、両者は相互に交渉し合って、生体の機構と機能を基盤・機序として精神の機構と機能が成立し、人間が成る。対象としての人間をかく見取ることにあるものと理解されるとも言えよう。

このとき、「心理学の方法が経験の主観化である限り、これを客観化的存在として普遍化できない。従って、心理学は、人間の精神における目的の実現・実践ということにならざるをえない<sup>8)</sup>。」

その際、「自然科学における客観性の意味とは違うが、主観性における客観性の認容をしなければならない。客観性における主観性は拒否されなければならないが、主観によって認容された客観性は、単に、自然として存在するのではなく、意味として存在するのである。認容される存在の意味は、一定の目的が実現された人間生活の表現である<sup>9)</sup>。」としている。

ここでは、「自己の立場は、これを超越して、主観・自己と客観・他者とが同時存在し、相互に条件となって規定し合う関係として存在する。

認識における主観化の究極である目的実現は、かくして、その客観化の究極である法則の発見と一致し、人間の社会生活は具体的現実性の形態において認識され、自然・精神両科学の方法を統一する新たな社会科学なるものを認めなければならない。人間の社会関係としての存在(側面)があるからである。

このようにして、人間学としての心理学の問題は、社会科学との関係によって解決されなければならない<sup>10)</sup>。」

そこで、「認識における具体化の方法としては、経験を主観的条件と客観的条件との相関の概念によって、人間生活の表現が歴史的社会的存在として理解される。

主観的条件から客観的条件を規定して考察する場合には、人間生活の表現は労働または行為として理解される。また、客観的条件から主観的条件を規定して考察する場合には、それは生産または発生として理解される。

ここでは、生活体・生命という存在が理解されてくる。その存在が、自分と同じく、人間であると考えられるためには、その存在に自分という主体が導入される。これで存在が分解する方向に進んだ場合、生命の崩壊であり、統合の方向に進んだ場合、生命の発展である<sup>11)</sup>」と言うのである。

城戸は、以上、こうして、人間学としての科学構成に関わって、その道程を提示し、人間存在全体をひとつの統一体として、主体を核とする人間学に関して、心理学が社会科学として、教育へのアプローチを成立させる道程を提示してくるのである。

ここで、わけて、注目しておきたいことは、第1に、一方向で、Locke 的伝統・思潮の自然科学的方法・人間関係のあり方(対象化・分析・説明)が光を当てる自然・生体としてのからだ、他方面で Leibnitz 的伝統・思潮の精神科学的方法・対人・対話的關係的あり方(文脈全体の流れの把握・感受・意味の了解)が光を当てる精神(含心理)、両者の相互交渉・統一して人格を担った人が成り、時空構成なる社会生活・(客観)と生活体(主体)・主観との相互関係のもと、人間学としての心理学を社会科学へと止揚してくることである。

すなわち、人間が担う生体としてのからだ、心理・精神、そして、社会関係としての「相反し合う多種極を人間のうちにひとつに統合・統一<sup>12)</sup>」する「主体」の導入をはかった<sup>11)</sup>。

思うに、城戸は、Jaspers K. の考えと同じく、たとえば「心身統合・統一、それ自体は、直ちに眼の前に認識できる対象であるというわけではない。それは心身統一という探求可能な領域を導く理念として試みている<sup>13)</sup>」ように思われることである。

第2に注目されることは、城戸が、自然科学を範とする科学の証しでもある客観性に対して、主観性における客観性の認容を求め、これを一定の目的実現された人間生活の表現である意味においてきた<sup>9)</sup>ことである。

このとき、人間生活の表現である意味の客観性の意味には、早坂の指摘である「集合的主観として、大多数の人びとで一致した見解・了解である客観性<sup>14)</sup>」を含んでふまえているように思われる。

最後に、城戸は、「人間学としての心理学に自然科学の場合、取扱わないと排除してきた個別性および価値観に関わって、「性格学を決疑法：(倫理上・宗教上の一般的規範と義務が衝突する特殊な場合に適用する実践的判定法)として、倫理学の基礎の上に設定されるようにし<sup>15)</sup>」、「文化科学のうちに認定されなければならない<sup>16)</sup>」との構想を立てていることにあるということである。

## 引用文献

- 1) 城戸幡太郎：現代心理学—その問題史的考察．評論社、1951(昭26) (昭25) ．
- 2) Allport G. W. : Becoming - Basic Considerations for a Psychology of Personality. Yale Univ. Pr. 1955, p.7, pp.7-12, pp.12-17.  
Allport G. W. (豊沢登訳)：人間の形成 - 人格心理学のための基礎的考察．理想社、1967(昭42) (昭34)、pp.22-23、pp.24-34、pp.35-46.
- 3) Allport G. W. (依田新・星野命・宮本美佐子訳)：心理学における人間．培風館、1977(昭52)、p.4、p.66.
- 4) 八木冕編：心理学 I、培風館．1967(昭42)、p.12.

- 5) 城戸幡太郎：1)に前掲載書、p.257.
- 6) 城戸幡太郎：1)に前掲載書、p.258.
- 7) 城戸幡太郎：1)に前掲載書、p.259.
- 8) 城戸幡太郎：1)に前掲載書、p.260.
- 9) 城戸幡太郎：1)に前掲載書、pp.261-262.
- 10) 城戸幡太郎：1)に前掲載書、p.263.
- 11) 城戸幡太郎：1)に前掲載書、pp.264-265.
- 12) Stern W. : Die menschliche Persönlichkeit. Verlag von Johann Ambrosius, 1923, pp.4-5.
- 13) Jaspers K. (内村祐之・西丸四方・島崎敏樹・岡田敬蔵訳)：精神病理学総論(上巻)．岩波書店、1953(昭28)、p.345、p.349.
- 14) 早坂泰次郎：看護と人間—ヴァン・デン・ベルグに寄せて．van den Berg J. H. (早坂泰次郎・上野轟訳)：病床の心理学．現代社、1990(1975)、p.149.
- 15) 城戸幡太郎：1)に前掲載書、第3編 第一章 心理学と性格学．p.206 (pp.199-206) ．
- 16) 城戸幡太郎：1)に前掲載書、第2編 第一章 精神科学と心理学．pp.64-86.

## 3. 「人間の科学」としての心理学における方法論に関する検討

いとぐち  
緒

これまで、筆者は「病気の臨床心理学」に代表される研究と実践、およびその教職に携わってきた。人への育みや援助に関わって、その手を添える職責の任を果し些かの自負をもってきた。

この間、絶えず、科学としての心理学が、果たして「人間の科学」たりうるのか、気になり、気にしてきた。

辿ってみると、「心理学には、人間に関する観方や捉らえ方に対置・相反する Locke 的伝統・思潮と Leibnitz 的それが流れている」<sup>1)</sup>との Allport, G.W の提起がみられる。Allport, G.W. は、この提起により、科学的な二分思考法によって起



る心理学の2分化に伴う崩壊に警告を発したのである。そして、Allport, G.W. は、対置・相反する両伝統・思潮に対する警告と合わせ、相剋の克服対応の見解として「折衷主義」<sup>2)</sup>を提言している。

なお、上の2で触れた城戸の見解によれば、「心理学は人間を自然科学的説明と精神科学的了解から検討・考察してきた。そして、精神は認識の主体であり、人間において存在する機能と置く。」<sup>3)</sup>Allport, G.W. のように、方法論的文脈においては、城戸の場合、心理学の対象・人間構成に関わる対象論的文脈に置き換えている。

さて、心理学は、Allport, G.W. が危惧し、警告したように、心理学のうちに流れている2大伝統・思潮に対して、自然科学的客観的心理学の立場は主客分離の思考法に基づく2分思考法の視座から、「Locke 的伝統・思潮の自然科学的説明を選択した。Leibnitz 的伝統・思潮にある精神科学的了解が、事実から法則へとの下から上への道ではなく、原理から事実へとの上から下への道であるため、科学的方法ではないと棄却してきた」<sup>4)</sup>からである。

さて、上の2で、人間学としての心理学の科学観に関わって、城戸の所論に触れてきた。そこから推察されてきたことが、次のことであった。

第1は、城戸のもとにおける科学観が、基本的に一心の奥に一 自然科学におけるそれがあるように思われた。

第2は、それで人間を対象化し、その領域を自然・生体・精神・心理；両者の統一としての人；その人（主観）と他者（客観）との関係としての存在の社会生活の3領域を導き出し、「多領域を人間という統一体・生活体の要に主体を導入」し、研究対象領域を類別、各領域に適う科学：主体に自然科学的説明の方法を、精神・心理に、精神科学的了解の方法を社会関係を軸とする社会科学的方法を各々に対応させ、言えばモザイク様な研究対象としての人間像を抽出することとなった。方法論に

依らず、対象論に依ったからである。

こうした展開の中で、ここで、注目すべきことが、第3のことである。

それは、ひとつに、人間学としての心理学に、科学のもとと排除してきた個性や価値の問題を導入し、「これを性格学に決議法として置き、性格学を倫理学の基礎の上に設定し」<sup>5)</sup>、「文化科学のうちに設置されるべきとの構想を提起している」<sup>6)</sup>ことである。

もう一つに「人間の社会関係<sup>7)</sup>」(生活の現実)に関わって人が本来人間として、自己を初め他者、および、諸事物・諸事象との関係にあることを提示してきたことである。

このことは、実は、対象論ではなく、方法論上、科学を初め諸所作がわれわれ人間の生活の現実における営為であるとき、この関係の仕様やその様態は、実は、科学の方法論における要となる鍵概念を成すとみ、その後の展開上の重要なヒントとなることとみているからである。

ただ城戸の場合、人間学(人間の科学)との関連において、心理学は、一方で認識の問題(方法論)と哲学と関係し、他方で存在の問題(対象論)として科学と関係することになることを示唆し、「現代心理学(当時昭和25、26年頃の心理学を指しているが)、以来、今日(平成28年、29年 ならんとしている)も、依然として」は、その方法論に行き悩んでいる<sup>1), 8)</sup>。

以上、思うに、主客分離思考法に依拠した自然科学における科学観のもと、城戸は、人間学としての心理学の対象である人間の「多様の統一」<sup>9)</sup>の姿に辿り着いた。対象論上成功した。

そんななかで、一方で心理学における認識の問題・方法論は哲学(観念論か実在論か合理論か経験論か)と、他方で存在の問題・対象論は科学と関係することになった。かくして、心理学は、今日、依然なお、その方法論に行き悩んでいるという問

題を提起せざるをえなかったのであろう。

## 引用文献

- 1) Allport, G.W.: Becoming – Basic Considerations for a Psychology of Personality. Yale Univ. Pr., 1955, p.7, pp.7-12, pp.12-17.  
Allport, G.W. (豊沢登訳): 人間の形成—人格心理学のための基礎的考察. 理想社, 1967 (昭42) (昭34), pp.22-23, pp.24-34, pp.35-46.
- 2) Allport, G.W. (依田新・星野命・宮本美沙子訳): 心理学における人間. 培風館, 1977 (昭52), p.4, p.16.
- 3) 城戸幡太郎: 現代心理学—その問題史的考察. 評論社, 1951 (昭26) (昭25), 第2編 第一章 精神科学と心理学, pp.71-72.
- 4) 城戸幡太郎: 3)に前掲書, 結論 人間学としての心理学の問題. pp.264-265.
- 5) 城戸幡太郎: 3)に前掲書, 第3編 第一章 心理学と性格学. p.206 (pp.199-206).
- 6) 城戸幡太郎: 3)に前掲書, 第2編 第一章 精神科学と心理学. pp.71-72.
- 7) 城戸幡太郎: 4)に前掲書, p.263.
- 8) 城戸幡太郎: 4)に前掲書, pp.200-201.
- 9) Stern, W.: Die menschliche Personalichkeit. Verlag von Johann Ambrosius Barth, 1923, pp.4-5.

### 1) 「人間の科学」としての心理学の目的とその対象について

学および科学は、およそ、その目的や対象論と方法論から成り立つ。ここでは、まず、その目的とその対象論から触れていこう。

かねて、目的や対象論が先か、あるいはその方法論が先かに関して、循環論的議論がなされてきたが、基本的には、目的や対象があつて、これに接近する方法論が続くと言われる。

その際、この問いを主客分離に基づく2分化し、そこから2者択一的思考法は、上に指摘の如く、不適確であり、望まれない。対象論に方法論的視座が必要であり、方法論に対象論的視座が必要であるからである。

さて、筆者は虚弱体質で生まれ、青年期に今日のがん、当時、國を滅ぼすと惧れた肺結核に罹患し、病者の心理に関する研究とその臨床実践に携わってきた。こうした生活体験を通じて、われわれがその人生途上で直面する、たとえば、病・老・死などに象徴される苦悩する人に対する援助の問題がたえず問われてきた。

その際、われわれ人間が、そのうちに担う相反し合う諸属性—たとえば、知性と情意性—といった、多様の統一にあつて、合目的的自律性をもつ人 (Person)<sup>1)</sup> が、その人となる (Becoming)<sup>2)</sup>、調和的に、健やかで、その人に適い、相応しいあり様 (Being)<sup>3)</sup> を探求することがその目的であり、研究対象となってくるのが導かれてくることになる。

このことは、まさに、われわれがひとり一人生きる生活の現実への関心にあることを示している。

## 引用文献

- 1) Stern W.: Die menschliche Persönlichkeit. Verlag von Johann Ambrosius Barth, 1923, pp.4-5.
- 2) Allport G. W.: Becoming: Basic considerations for a psychology of personality. Yale Univ, 1955. (Allport G. W. (豊沢登訳): 人間の形成—人格心理学のための基礎的考察. 理想社, 1967 (昭42) (昭34) .)
- 3) Maslow A. H.: Toward a Psychology of Being. D. Van Nostrand Comp, 1962.

## 2) その方法論上の問題

城戸が緒で既に触れたように、「現代心理学(当時を超えて今日なお)は、哲学と関係するその方法論に行き悩んでいる。<sup>1)</sup>」実際、「心理学者たちは、心理学の科学性について考え続けている<sup>2)</sup>」と言われていた。また、「現代心理学(それ以降、20世紀前半に至るも)が、自然科学的研究方法を基盤とする実証主義(一含操作主義による論理実証主義)に偏重し、不適切や不十分さをかかえているため、哲学的考察の受容が要請される余地が存在している<sup>3)</sup>」と言われる。

既に指摘の如く、「心理学には、かねてより英米の経験論に基づく自然科学的で客観的方法に依って分けて知り、説明するLocke的思潮・伝統<sup>4)</sup>」と、「欧州大陸の合理論に基づく精神科学で、意味文脈に沿って了解するLeibnitz的思潮・伝統とが、対置し<sup>5)</sup>」2者択一的に、科学はLocke的思潮・伝統を選択し、Leibnitz的主観的思潮・伝統の排除をはかろうとしているのが実際である。

相反し合い、対置し合うこうした相克状況に対して、これによる心理学の分裂を恐れ、警告し、Allport G.W. は「いかに調和をはかるかを問い、それぞれ別々の二律背反の理論の克服をもたらす、育ちうる人間のイメージをもたらす体系的折衷主義の方向へ導こうとする。そして、これが解放体系としての人間事象すべてを同じ決定論的方法で統一できるメタ理論だ」として、提言している。

しかしながら、そこには、思うに、2者択一には持っていないが、基本的に、主客分離の思考法に依拠しているように見える。相反・対置する両思潮・伝統との相克の克服はこの二分思考法のもとでは一とかくそのようにもっていきが—なかなか至難なことのように思われる。

## 引用文献

- 1) 城戸幡太郎：現代心理学—その問題史的考察 結論 人間学としての心理学の問題. 評論社, 1951 (昭26) (昭25), pp.200-201.
- 2) Boring E. G.: A History of Experimental Psychology. Appleton-Century-Crofts, 1950, p.320.
- 3) Buytendijk, F. J. J.: Husserl's Phenomenology and Its Significance for Contemporary Psychology. Lawrence N. & O'Connor D. (Edt.) Readings in Existential Phenomenology, Prentice-Hall, 1967, pp.353-354.
- 4) Allport G. W.: Becoming: Basic considerations for a psychology of personality. Yale Univ.Pr., 1955. p7, pp.7-12.  
Allport G. W. (豊沢登記): 人間の形成—人格心理学のための基礎的考察. 理想社, 1967 (昭42) (昭34), pp.22-23, pp.24-34.
- 5) Allport G. W.: 4) ibid, pp12-17.  
Allport G. W. (豊沢登記): 4) 前掲書, pp.35-46.
- 6) Allport G. W. (依田新・星野命・宮本美沙子訳): 心理学における人間. 培風館, 1977, p.17.

## 3) 現象学的方法・視座の必要と要請

ところで、上に記した状況のもと、哲学における認識論上でも、上に例示の心理学において、説明か了解かといった対置・相剋のような、対置と相剋が起こっていた。

それは、具体的に言えば、(もの)が見えるからあるとの観念論と、(もの)があるから見えるとの实在論とのいづれかが正しいのか、まさに、主客分離に基づく二分思考法から2者択一的に循環論的な議論を重ねてきていた。

このような状況のなかで、そうした2分法的な2者択一的な論争の正否の判断を保留し、あるがまま、事象それ自体へという研究者の態度変更、

すなわち、主客分離に基づく自然科学的思考から、主客をいえば、主客融合・統合への思考法への転換をはかろうとしたのが創始者 Husserl E. の現象学的視座であり、方法なのである。

Husserl E. は、現象学の創始に当り、Brentano F. の記述心理学をその先駆とした<sup>1)</sup>、と言われるように、事象それ自体とは、個人が経験する生の記述・現象記述を指し、意味した。「対象や世界は絶えずこの主観的な働きから生じ、また生じてきたような意味と存在様相をもってのみ、われわれにとって存在となる<sup>2)</sup>」からである。このことは、「我一意識を（意識作用・志向性：～へと立ち向かう）一意識す（意識対象・現象＝主客融合・統合＝私の生活の現実<sup>3)</sup>」（文中（）は筆者が追記）ところにある。

ちなみに、心理学において、現象学という用語を初めて方法論上で用いて、表記したのは、Snygg D. & Combs A. W. である。「彼らは、心理学の自然科学的客観的アプローチによる人一般のみでは適切でないと、個にアプローチの必要を提起してきたところにあった<sup>4)</sup>」

ただし、「この現象学的アプローチの用語は、彼らの師 William Lune の示唆によって得たと言われる。したがって、Snygg D. & Combs A. W. らが、Husserl E. の現象学に触れたわけではない。Husserl E. の弟子であった Gestalt 心理学派の心理学者、とりわけ Köhler W. と出会い、Koffka F. の心理学的環境や認知の場といった所論に触発され、現象学的アプローチを提言する契機としたと言われる。<sup>5)</sup>」

Husserl E. は、実際、近代心理学が自然科学を模範とすることによって、理性と存在とは分かたるべきとし（主客分離：筆者追記<sup>6)</sup>）、人間とその現象を対象化・客観化し、主観性の排除を目指すことによって、志向性という「能作である主観性の捉え難さを招き<sup>7)</sup>」、「心理学に対する生の意義を喪失する<sup>8)</sup>」ことになったとの危機と警告を告

知してきた。人間の科学としての心理学にとって、われわれの生活の現実への関心に向けた前記の2つの対象論にかかわって、現象学的方法・視座の必要とその要請とが求められてくることになってこよう。

## 引用文献

- 1) Spiegelberg H.: Phenomenology in Psychology and Psychiatry: A Historical Introduction. Northwestern Univ. pr., 1972, p.28.
- 2) Husserl E. (細谷恒夫・木田元訳): ヨーロッパ諸学の危機と超越的現象学. 中央公論社, 1974, p.227.
- 3) Husserl E. (細谷恒夫・木田元訳): 2) に前掲書, pp.243-246.
- 4) Combs A. W. & Snygg D.: Individual behavior: A perceptual approach to behavior. Harper & Row Publ., (1949) 1959, pp.10-11.
- 5) Spiegelberg H.: 1) ibid, pp.146-148.
- 6) Husserl E. (細谷恒夫・木田元訳): 2) に前掲書, p.86.
- 7) Husserl E. (細谷恒夫・木田元訳): 2) に前掲書, p.95.
- 8) Husserl E. (細谷恒夫・木田元訳): 2) に前掲書, p.16.

## 4. 現象学的方法・視座：「我・意識対象を意識す<sup>1)</sup>」－我の取る～との関係の仕様とその様態

われわれ人間は、その本質属性として、相反し、対置する両極が自らのうちにひとつに融合・統一し、そこから新しい世界を次々と創成してきている。その一端を言えば、たとえば、陽・男性と陰・女性とがひとつに融合・統合して新しい生命の誕生がはかられている。また、交感神経と副交感神

経とがひとつに融合・統一して自律神経系となり、身体ホメオスタシスを創成してきている。さらに、明・昼と暗・夜とはひとつに融合・統合して1日という時間を創成してきている。

われわれ人間のものの考え方・捉え方にも相反し、対置し合う両極がある。当然のことながら、方法論が依拠する思考法にも相反対置し合う両極がある。

自然科学の誕生に関わって、Descartes, R.による「主客分離に基づく物心二元論の思考法想起<sup>2)</sup>」があずかって大きいことは周知の通りである。

自然科学は、依拠する主客分離に基づく二分思考法のもと、研究者はその対象(人・事物・事象)を突き放し、第3人称(それ・モノ)に置く。研究者自身もこの照り返しを受け、第3人称化、まさに対象化し、中立の立場に立つ(研究者着用の白衣はその象徴だと言われる)。そして、対象化した対象・モノをながめ、観察する(器械の援用)。得られた資料を冷静な眼(器械の援用)で分析し、そこから因果律あるいは統計学的相関関係を通じて、一般原理や法則性を導き、説明という知る仕方(分けて知る)を目指すのである<sup>3)</sup>。

これが自然科学における客観的方法である。そこにおける客観性は、科学であることの証しにあり、「人がどう見るか、どうしたいかといったことにかかわりなしに、モノがモノとしていつも変わらずに、同じに持ち続ける性質であるとの客体的同一性に置く<sup>4)</sup>」のである。

客観性のこの意味は、端的に言えば、対象(モノ化された人・事物・事象)・客観と、その認識・(主体(我)の主観)との一致を意味している。その際、ここが重要でかつ注目しておきたいのは、この客観と主観の一致か否かの判断は主体(我)によるということである。

このことは、主体(我)は、対象化に向けて主客分離に基づく二分思考法をとるが、最終的に主客融合・統一の客観性に還ってくるのを見届けるこ

とができよう。

このことは、自然(モノ)を対象化(モノ化)し、分析し、知り、説明する自然科学といえども、そうした営為はわれわれ人間の生活の現実の只中における営みであることを告げている。

このことは、Husserl E. 創始の現象学が、「我—意識対象(たとえば生活の物理的地理的環境への志向性する)を—意識す」ことから、われわれの生活の現実はもともと主客融合・統一にある。そこで、自然科学は、一次的主客融合・統一から二次的に主客分離させ、分けて知るなかで、「客観化された自然(モノ)の存在は、個人の経験を越えた普遍性において認められ、ここに経験の主観性の問題は完全に克服されたということを指摘する<sup>5)</sup>」がこの指摘は誤りである。自然科学と言えども、科学営為はわれわれ人間がその生活の現実(主客融合・統一)の只中での営みであることを見失っている。客観と主観との一致の判断は主体にあって、主客融合・統一へと還ってくるからである。ここには主客統合は主客の分化にあり、主客の分化は主客統合にあると言われるように、相反し合う両極はひとつに融合・統合にあるということである。

この意味で、現象学的方法は、我—意識対象を—意識することにあるが、主客融合・統合にあるたとえば生活の現実、あるいは、内面的な意味体験事象にスポットが当てられる。その際、「その客観性として意味するのは、すべてのまた大多数の人々の間で一致した見解で、それは、たとえ一人の見解としては主観的だったとしても客観的である<sup>6)</sup>」この客観性を「集合的主観<sup>6)</sup>」あるいは、「相互主観性<sup>7)</sup>」、また「間主観性<sup>8)</sup>」と称する。

この客観性が担う意味は、われわれ人間の生活の現実において、ともにわかり合い、わかち合い、共有(同)し合える世界(客観性)を指している。端的にたとえるなら、地球が動くのをわれわれ人間は誰ひとりでも見たという者はない。だが、今日人は大抵学理である“地動説”を真理・真実と

して理解し合えており、これは、客観的であるとしている。

このことは、われわれ人間の生活の現実において、客観・モノと主観・認識との一致である客体的同一性としての客観性を超えて、集合的主観・相互主観性・間主観性としての客観性がそれとして稼働しているのも実際である。

ところで、われわれ人間の生活の現実のなかで、自然科学の誕生・開花・隆盛をさせてきた主客分離に基づく客観的方法是、関係存在としてのわれわれ人間が人間やその事物・事象にとって取る関係の仕様として次のように具体化してくることになる。

それは、わけて第2次の社会的集団・組織(たとえば職場など)において主軸を成す役割的で、道具的な機能関係である人間関係(Human Relationships)だと言われる。

これは1930年代、Mayo E.らが中心となって、米國最大の電気会社のHawthorne工場で行ったHawthorne研究にあるという。そこでは、従業員間の関係の良悪がその生産性の増減に大きくあざかることが知られ、まさに人間関係の重要性が認識され、心理学や社会心理学の研究対象としてなって、急速に定着したのである。

さて、「関係が意味するRelationには、言及するとの意味と行為を含み、そこに人間の主体性が担われていると言われる。このことから、人間関係に対して、精神医学や臨床心理学からの批判がなされてきた<sup>9)</sup>」。

それは、人格的側面を強調した人間本来的、関係存在であるその本来の関係を提起したものであった。そこでは 言えば、生まれたばかりの第一次的な母子関係を原型にみ、精神療法における治療者と来談者の関係に象徴される対人対話関係(Interpersonal Relationships)の提起なのである。

われわれが、本来、関係存在あるというとき、我・

自我は、私自身に自ら問いかけると同時に、他者のみならず、事物・事象、世界に向けて自ら問いかけ、関係するあり様を指し示している。

その際、われわれ人間の成長発達に伴う知的属性により、主客分離に基づく思考法のもと、自然科学に象徴されるモノに対する学的な関心(客観的方法)が、生活の現実における人・他者との関係として、役割的で、道具的な機能関係である人間関係に具体化されてくる。

このとき、我-意識対象を-意識するとの主客融合・統合に基づく思考法から、あるがままの現象に注目したのが現象学的視座であった。

そこでは、「人は基本的に互いに同じ主体を担うが、しかし、主体は互いに違うことをふまえ、研究者・「我」・私は、被研究者を第二人称「あなた」に置くのである。そして、「私」は、「あなた」を見つめ、その内面的意味体験事象・世界を感受し、これを「あなた」にフィードバックし、相互に 問いかけとそれに対する対応・対話の交流を積み重ね、「あなた」と共に歩むのである。そこから、互いに相手のことをわかり(了解)、わかり合い、そして、わかち合い、共同世界を創成してくるのである<sup>10)</sup>」。これが対人・対話関係である。主客融合とは、主・主交流・対話⇒主・主融合・統一を意味する。そこから共同世界:客観性・集合主観性の原型への展開がはかられてくるのである。

なお、この対人・対話関係に関して、Buber M.<sup>11)</sup>やParsons T.<sup>12)</sup>らの見解を忘れることはできない。

## 引用文献

- 1) Husserl E. (細谷恒夫・木田元訳): ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学. 中央公論社、1974、pp.243-246.
- 2) Descartes R. (桂寿一訳): 哲学原理. 岩波文庫、2014(1964)、pp.84-87(第51項~53項).  
Descartes R. (谷川多佳子訳): 方法序説. 岩波文庫、

- 2013 (1997)、pp.46-47.
- Jaspers K. (草薙正夫訳)：哲学入門．新潮社、1956  
(昭和31) (昭和29)、pp.38-50.
- 3) 上野 轟：病床の臨床心理学－病気像と病気との和解．フィリア、2006、p.13.
- 4) 早坂泰次郎：看護と人間－ヴァン・デン・ベルグに寄せて．van den Berg J.H.(早坂泰次郎・上野 轟訳)、  
病床の心理学．現代社、1990 (1975)、p.148.
- 5) 城戸幡太郎：現代心理学－その問題史的考察、結論  
人間としての心理学の問題．評論社、1951 (昭和  
26) (昭和25)、p.258.
- 6) 早坂泰次郎：前掲書4) p.149.
- 7) 新田義弘：自己性と他者性－視点のアポリアをめ  
ぐって．新田義弘・宇野昌人編：他者の現象学－哲  
学と精神医学からのアプローチ．北斗出版、1982、  
pp.18-28 (pp.11-34) .
- 8) 川野健治：介護における行為の協調関係について－  
食事介助場面の検討．川野健治・圓  
岡偉男・余語琢磨・太田俊二・木戸功・橘弘志・原  
知章・三嶋博之：間主観性の人間科学－他者・行為・  
物・環境の言説再構にむけて．言叢社、1999、  
pp.181-203.
- 9) 早坂泰次郎：序説 人間関係の心理学．川島書店、  
1975、p.9.
- 10) 上野 轟：3)に前掲書、pp.13-15.
- 11) Buber M.(野口啓祐訳)：孤独と愛－我と汝の問題．  
創文社、1956.
- Parsons T. & Bales R.F.：Family Socialization and  
Interaction Process., Routledge & Kegan Publ.,  
1956, pp.318-319.